Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-05-15

近代アメリカのメディアに見る表象としてのファッションと女性ー雑誌・パターン・ディスプレイー

平芳，裕子

(Degree)
博士（学術）
(Date of Degree)
2018-03-07
(Date of Publication)
2022-03-07
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
乙第3341号
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D2003341

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

論 文 内 容 の 要 旨

氏　　名　平芳　裕子
専　　攻　人間発達専攻
指導教員氏名　小高　直樹

論文題目（外国語の場合は，その和訳を併記すること。）

近代アメリカのメディアに見る表象としてのファッションと女性
—雑誌・パターン・ディスプレイ—

論文要旨

本研究は、近代アメリカのメディアに見る表象としてのファッションと女性の歴史とその変容について考察するものである。19 世紀前半から20世紀前半までの女性誌やファッション雑誌、服飾や絵画、小説などの言説やイメージ、また都市空間におけるディスプレイやミュージアムの展覧会を具体的事例として取り上げながら、ファッションがいかに「女性的なもの」として言説化され、視覚化され、ファッションとの関わりのもとに理想的女性像が成立、変容したのか、その歴史を明らかにする。

従来の服飾史およびファッション史では、服飾や絵画、ファッション・プレートを中心とする実証的資料に基づき、服飾様式の展開や衣服習慣の変化、あるいはオートクチュール（高級仕立服）産業におけるデザイナー（作家）論が記述されてきた。本研究はファッション研究における方法論的問題の検証を踏まえ、先行研究では看過されてきた主題と対象を導き出し、「19世紀」、「アメリカ」、「メディア」を領域横断的に結びつけることよって、新たな視点から近代ファッションの歴史にアプローチする。すなわちデザイナー誕生以前の19世紀前半まで時代を遡り、パリにおける作品創造の歴史ではなくアメリカにおける流行受容の問題を取り上げ、さらにメディアにおけるイメージと言説の関係性を分析することによって、近代におけるファッションと女性の関係性に対して新たな歴史解釈を試みるものである。

本論では、19世紀前半から20世紀前半までのメディアにおける表象を分析し、各時代における四つの女性像の特質とその変遷を明らかにした。それらは19世紀前半における「飾る女性」、19世紀半ばにおける「縫う女性」、19世紀後半における「模る女性」、20世紀前半における「巡る女性」として言い表すことが可能であり、本論ではそれらの表象がいかにして言説としてイメージとして構築されたのかを考察した。

まず第1章では、19世紀前半のアメリカの女性誌『レディズ・ブック』とその後継誌『ゴーディズ・レディズ・ブック』を通じて、ファッションの社会的意義の変化とそれに伴う理想的女性像の生成を明らかにした。

東部諸都市と商業の発展を背景として、ファッションの将来的需要を見据えた出版者により女性誌における流行情報の掲載が開始される。ところが19世紀前半の市民社会において、ファッションは始めから許容されていたわけではなかった。いまだプロテスタント的禁欲主義が浸透した社会にあっては、ファッションは物議を醸し出す要因であった。そこで女性誌は、ヨーロッパの貴族的奢侈への憧れと、内面的自己表現の信条を調停するために、「控えめな装い」のモデルとして「フィラデルフィア・ファッション」を打ち出す。それはパリのレディのための華麗な装いではなく、妻として母として女主人としての役目を全うする「良き女性」のための模範的な装いであった。室内を美しく飾り付けることによって快適な家庭を保つように、自身の身を飾ることによって一家の社会的・経済的地位を標榜する。そのような行いが「女性の仕事」として位置づけられることによって、「ファッション」は社会的に容認されるものとなる。それとともに、ファッション・プレートはただ流行を伝達する手段としてではなく、描写の装飾性を高め、室内を飾る装飾品の役割も果たすこととなった。19世紀前半の市民社会における理想的な女性像、すなわち「飾る女性」がいかに言説化され、イメージとして描写され、正当化されたのかを第1章において明らかにした。

続く第２章においては、19世紀半ばのアメリカ女性誌『ゴーディズ・レディズ・ブック』やイギリスの雑誌『パンチ』、絵画、小説、日記などを通じて、社会階層の分化と「裁縫」の価値化の過程において新たに登場した女性像を明らかにした。

19世紀前半の上流階級や新興階級の女性たちにとって重要であったのは、洗練された趣味と地位の高さを表現するために「いかに装うか」であった。ところがファッションの需要が高まるにつれて、その生産に携わる「お針子」たちの存在が社会的にクローズアップされるようになる。それまでのアメリカの女性誌では「レディ」の教養としての「刺繍」が話題となることはあっても、下層階級の針仕事は決して触れられなかった。だが産業革命によるお針子労働の増加とともに、下層階級の苦境がイギリスのメディアでさかんに報じられ、アメリカのメディアにも影響を及ぼすようになる。雑誌の大衆化と購買層の拡大、衣服産業の発展とファッションの普及を背景として、アメリカの女性誌においてもお針子労働だけでなく、家庭内の主婦による服作りや修繕までもが取り上げられるようになる。女性ならば誰もが手にした針、だが日常であるがゆえに人目に隠れていた「裁縫」が、言説としてイメージとして出現する。それとともに下層階級のお針子労働ですら、外の社会における工場労働と差別化され、「女性の領域」にとどまる仕事と見なされる。ところが「裁縫」が「女性の仕事」としての社会的な価値を確立すると、表象としての「縫う女性」は姿を消してしまう。19世紀半ばの衣服産業の発展期における社会階層と針仕事の関わりを解明しつつ、「縫う女性」のイメージの出現と消滅のプロセスを第2章において明らかにした。

そして第3章では、19世紀後半のアメリカの女性誌『ゴーディズ・レディズ・ブック』とファッション雑誌『ハーパース・バザー』等を通じて、家庭裁縫の推進と流行受容の軌跡から浮かび上がる女性像の特質を明らかにした。

19世紀半ばにおいてひとたび「裁縫」の価値が認められると、女性誌やファッション誌において衣服制作の方法が教示されるようになる。雑誌に裁縫道具の宣伝広告が掲載され、服作りのガイドとなるパターンが付録につくようになった。ところがパターンは実際に使用されると切り取られ、最終的には捨てられてしまう。しかしパターン自体は残らないが、パターンを取り巻く雑誌の言説とイメージを通じて、以下の様相が明らかとなる。すなわち、パターン専門店が登場し、衣服制作の新たな方法が考案され、雑誌の付録や通販が発展し、パリのオートクチュールがアメリカに受容されていく過程である。当時の女性たちはパターン

を用いた家庭裁縫を通じて、流行のスタイルを手に入れることができた。このことは同時に、パターンに従って布を型取り、裁断し、衣服に縫い合わせるという女性たちの作業が、「流行に倣う」という新たな習慣を自らの身体に取り込む行為でもあったことも示している。女性たちは流行に従うべく馴致された身体を歴史的に獲得することによって、その後の（家庭裁縫を必要としない）既製服時代においても、次々と生み出される新しいファッションを追い求めるべく駆り立てられることとなる。19世紀後半の商品経済発展の時代における消失するパターンと流行受容の関係の考察を通じて、「模る女性」の振舞いの軌跡を第3章において明らかにした。

さらに第4章では、20世紀前半のアメリカのショーウィンドウやミュージアムにおけるディスプレイを通じて、衣服産業の発展とそれに伴うファッション展示の成立において回帰する女性像を明らかにした。

19世紀末から20世紀前半にかけて発展したデパートのショーウィンドウは、物質的豊穣から劇的世界を演出し、消費者としての女性の購買欲を誘発させる仕掛けとなった。女性たちは制作現場からは排除され、自らを映し出す鏡としてのショーウィンドウの鑑賞者として育成された。またミュージアムの所蔵品を活用したデザイン推進運動により、歴史衣装や民族衣装から現代衣服のデザインが考案され、衣装がミュージアムにおいて展示されるようになる。展覧会は作品としてのファッションの価値を保証し、芸術と同等の資格を与えるべく機能した。かつては女性誌においてファッション・プレートのなかに描かれていた衣装が、ショーウィンドウやギャラリーにおいて実物として展示されるようになる。それらは女性たちの欲望を掻き立てながら、鑑賞に価するオブジェとしての地位を獲得する。さらにファッションを纏う女性たちの存在を視覚的なものへと変換した。「見られる服」の誕生は、「飾る女性」に文化的な根拠をもたらし、女性服の流行を更新するファッション・システムに社会的な正当性を与える。20世紀前半の二次元から三次元的視覚装置の登場において、なお理想像として「巡る女性」のイメージと視線の反復、すなわち近代的女性像が再生産されていくプロセスを第4章において明らかにした。

以上、19世紀前半から20世紀前半のアメリカのメディアにおいて顕著に現れた「ファッションをめぐる女性の表象」の歴史を明らかにした。19世紀前半の「飾る女性」から19世紀半ばの「縫う女性」、19世紀後半の「模る女性」、20世紀前半の「巡る女性」に至るまで、ファッションを通じて理想的な女性像が形成されてきた。これらの理想的女性像は、時代により異なる特徴を持ち合わせてはいるものの、一貫して「ファッション」との関わりのもとに作り出されていた。どの時代においても「ファッション」は「女性的なもの」として言葉で語られ、イメージで再現されることによって、両者は繰り返し結び付けられてきた。理想的な女性像は、まさしく「ファッション」を通じて形成されてきたのである。ここにおいて19世紀前半から20世紀前半におけるアメリカのメディアは、「ファッション」と「女性」との強固な関係を構築し、再生産する装置として機能したと言える。

（注）3,000～6,000字（1,000～2,000語）でまとめること。

別紙様式５

［論文博士用］

論文審査の結果の要旨

氏　　名	平 芳 裕 子		
論文題目	近代アメリカのメディアに見る表象としてのファッションと女性 ― 雑誌・パターン・ディスプレイ ―		
判　　定	合　格　・　不 合 格		
審査委員	区　分	職　名	氏　　名
	主　査	教授	小高直樹
	副　査	教授	梅宮弘光
	副　査	教授	岡田章子
	副　査	国際文化学科 教授	吉田典子
	副　査	青山学院大学 名誉教授	小林康夫

要　　旨

本研究は，近代アメリカにおける19 世紀前半から20世紀前半までのさまざまなメディア（女性誌やファッション雑誌，服飾や絵画，小説などの言説やイメージ，都市空間におけるディスプレイやミュージアムの展覧会など）を取り上げ，そこに見る「表象としてのファッション」を分析することによって，ファッションがいかに「女性的なもの」として言説化され，視覚化され，ファッションとの関わりのもとに理想的女性像が成立，変容したのか，その歴史を明らかにしようとする試みである。

本論文は，序論と，19世紀前半から20世紀前半までのアメリカのメディアにおける表象分析から得られる4つの女性像に対応する4つの章，及び結論から構成されている。

序論では，「ファッション史の相対化の試み」と題して，服飾様式の展開や衣服習慣の変化，あるいはオートクチュールにおけるデザイナー論などを中心とした従来の服飾史研究が抱える方法論的問題の検証を踏まえ，そのうえで，メディア表象という新たな視点によるアプローチが，近代におけるファッションと女性の関係性に対する新たな歴史解釈を提供すると述べている。

まず第1章では，「飾る女性」と題して，19世紀前半のアメリカの女性誌『レディズ・ブック』とその後継誌『ゴーディズ・レディズ・ブック』を通じて，プロテスタント的禁欲主義が浸透した社会におけるファッションの社会的意義の変化とそれに伴い登場した理想的女性像としての「飾る女性」像の成立過程を明らかにしている。

続く第2章では，「縫う女性」と題して，19世紀半ばのアメリカ女性誌『ゴーディズ・レディズ・ブック』やイギリスの雑誌『パンチ』，絵画，小説，日記などを通じて，19世紀半ばの衣服産業の発展期における社会階層と針仕事の関わりを解明しつつ，社会階層の分化と針仕事「裁縫」の価値化の過程において新たに登場した「縫う女性」像の出現と消滅のプロセスを明らかにしている。

そして第3章では，「模る女性」と題して，19世紀後半のアメリカの女性誌『ゴーディズ・レディズ・ブック』とファッション雑誌『ハーパース・バザー』等を通じて，とくに付録としてつくようになった衣服制作のガイドとなる「パターン」に注目し，19世紀後半の商品経済発展の時代における消失するパターンと流行受容の関係について考察し，家庭裁縫の推進と流行受容の軌跡から浮かび上がる「模る女性」像の特質を明らかにしている。

さらに第4章では，「巡る女性」と題して，20世紀前半のアメリカのショーウィンドウやミュージアムにおけるディスプレイといった新たな三次元的視覚装置の登場に注目し，衣服産業の発展とそれに伴うファッション展示の成立に伴ってファッションがいかに「見られるもの」として制度化され，またそれを纏う女性たちが「見る／見られる」存在として規定されるようになったのかについて考察し，19世紀の「良き女性」に回帰する「巡る女性」像の成立を明らかにしている。

結論では，各章を通じて指摘した，各時代においてメディアを通じた言説とイメージの元に作り上げられてきた4つの女性像（「飾る女性」「縫う女性」「模る女性」「巡る女性」）がいずれも「ファッション」との関わりのなかで形成されてきたことを確認し，19世紀から20世紀にかけてのアメリカのメディアが，ファッションと女性の強固な関係を構築し再生産する装置として機能したと結論している。

学位申請者は，本論文に関わる下記審査付き学術論文10編を発表しており，博士学位申請の基本的要件を満たしている。

(1)「「ファッション」―まなざしの装置」『服飾美学』第39号，2004年，pp.37-54
(2)「フィラデルフィア・ファッション―『レディズ・ブック』における良き女性の表象―」『服飾美学』第47号，2008年，pp.55-72
(3)「「正統なるファッション」とは―『ゴーディズ・レディズ・ブック』のファッション・プレートをめぐる言説―」『美学』第60巻第2号，2009年，pp.84-97
(4)「19世紀アメリカにおける女性と装飾―『ゴーディズ・レディズ・ブック』の言説を通じての考察―」『デザイン理論』56，2010年，pp.45-58
(5)「ファッション史の相対化の試み―『ゴーディズ・レディズ・ブック』を手がかりに―」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科 研究紀要』第3巻第2号，2010年，pp.87-94
(6)「19世紀半ばのイギリスにおける「お針子」の表象」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科 研究紀要』第5巻第1号，2011年，pp.75-83
(7)「「縫う女性」の表象―『ゴーディズ・レディズ・ブック』を手がかりに―」『美学』第64巻第1号，2013年，pp.155-164
(8)「女工，お針子，家庭裁縫―19世紀アメリカのファッション文化における女性―」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科 研究紀要』第7巻第1号，2013年，pp.43-50
(9)「パターンによる流行受容― 初期『ハーパース・バザー』の重要性」『デザイン理論』68，2016年，pp.21-34
(10)「モデルに倣う― ファッションにおけるパターンの出現」『表象』第11号，2017年，pp.254-269

本研究は，ファッション研究の方法論的諸問題の批判的検証を踏まえ，従来の服飾史・家政学・社会学・歴史学・美術史・女性史・アメリカ研究などの複数の学術分野で散逸的に取り上げられてきた対象を，メディア表象という観点から総合的に捉えなおすことによって，近代におけるファッションと女性の関係性に対して新たな歴史解釈を試みたもので，ファッション研究における新たな知見を得たものとして価値ある集積であると認められる。

よって本審査委員会では，学位申請者の平芳裕子氏が博士（学術）の学位を授与されるに足る十分な資格を有するものと認める。